

私と天文学〔II〕

「宇宙開発」ことはじめの頃

岸田純之助 (朝日新聞・論説顧問)

私が頭上の天空を、強い関心をもって眺めるようになったのは人工衛星が打ち上げられてからであった。

1957年10月4日、ソ連が最初の人工衛星「スプートニク」を軌道にのせた。世界の人々が驚いた。朝日新聞社では、週刊朝日編集部で「人工衛星」と題する緊急増刊を発行し、3回も増刷した。

新聞にも、ニュースとして、スプートニクの軌道の予報が載った。私たちは、よく有楽町にあった朝日新聞社の屋上から、日暮れ時、スプートニクが太陽の光を受けて星のように光りながら軌道上を動いていくのを眺めた。もし、現在のような日本経済の状況だったら、東京の都心で人工衛星を肉眼で追跡することなど思いもよらなかっただろう。だが、そのころはよく見えた。私の家(品川区)の庭からも、家族といっしょにたびたび、スプートニクをはじめ、その後の人工衛星を飽かず眺めた。人工衛星はなぜとびつづけることができるのか、なぜ明け方と日暮れ時の、空が暗い状態のもとで見えるのか、といった解説が新聞や雑誌にニュースとして扱われるようなころであった。

私の手もとに、朝日新聞社発行(1960年)の「図表・人工天体の軌道」という小冊子がある。当時、東京天文台で、助教授をしておられた竹内端夫さんの書かれたものである。3年間にすでに40個以上もの人工衛星や人工惑星すなわち人工天体が生まれたこと、それらの人工天体の軌道について、新聞などに報道された資料からでも、その特性を求めることができるようにと考えて、この冊子をつくった。「はしがき」に書かれている。「平均高度と周期との関係」、「大気抵抗の影響」、「人工衛星、月ロケットの明るさ」、「月ロケット打ち上げの好期」、「地球からの距離と速さの関係」、「惑星に到達するまでの所要日数」など、24章にわたって解説されている。少なく

とも私には大変便利で、よく利用した資料だった。

そのころ、よく、他の天体に住んでいるかも知れない高等動物つまり宇宙人との交信の可能性も話題になった。1959年にはそれを実際に試みようという「オプマ計画」も発表された。なくなった畑中武夫東大教授(当時)にこっついて、コーネル大学のフィリップ・モクソン教授に会うため芝パーク・ホテルにいったのは、1960年3月のことだった。宇宙人がどんな信号を地球に送ってくるかについてのモリソン教授の見解を聞こうと思ったのである。

多分宇宙人はテレビの画像信号を送ってくる。その信号をどこで区切って次の線に移せばよいかをわかるようにするため、最初は「月」についての情報を送ってくるはずだ。そして、地球人が受信の仕方がわかったら宇宙人の宇宙での位置をわかるように示す。そして自己紹介をいろいろと伝える。……といった話だった。私はこの話をさっそく「科学朝日」1960年5月号に書いた(「恒星人からの信号—モリソン教授の推理」)。これはあちこちで引用された。

これが、天文学といえるのかどうか、私は知らない。だが、私が天文学の専門家にいろいろのことを教えてもらった、宇宙開発のはじまりのころの、懐しい思い出なのである。

◇ 2月の天文暦 ◇

日 時	記 事
2 9	朔
4 18	月 最遠
5 0	立 春 (太陽黄経 315°)
10 4	冥王星 留
10 13	上 弦
17 10	望
17 18	月 最近
19 20	雨 水 (太陽黄経 330°)
24 2	下 弦
25 15	土 星 留

◇ 2月の日月惑星運行図 ◇

